

〔シンポジウム〕

「変貌する英語学習環境とコミュニケーション」

— 国際化とマルチメディア化を踏まえて —

パネラー	白鷗大学教授	飯塚成彦
	熊本大学教授	福田昇八
	文京女子短期大学教授	羽鳥博愛
司会	札幌学院大学教授	岩城禮三
	同	及川英子

岩城 定刻でございますのでシンポジウムを開始致します。司会を担当しますのは札幌学院大学人文学部英語英米文学科の私、岩城と、隣におられる及川の両名でございます。私ども不慣れでございますので、ご参会の皆様方の格段のご協力をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

お招きしております講師の先生方は、ご発表いただく順にお座りいただいています。

演壇に向かひまして左から、白鷗大学教授の飯塚成彦先生でいらっしゃいます。

次が熊本大学教授の福田昇八先生でいらっしゃいます。

次が文京女子短期大学教授の羽鳥博愛先生でございます。

講師のご略歴などを申し上げる前に、本日のシンポジウムの主旨につきまして若干説明させていただきます。

本日のテーマは正面に掲げてございますが、「変貌する英語学習環境とのコミュニケーション：国際化とマルチメディア化を踏まえて」と設定させていただきました。

今まさに平成の教育改革と言われておりまして、国を挙げて、21世紀に生きる学生・生徒・児童に必要な資質・能力を育成する施策が次々に展開されつつあります。

英語教育も、かねてから改革の必要性が叫ばれておりまして、厳しい批判や論争も展開されており、これに対応いたしまして、行政面あるいは指導面で多くの試行が行われてきているところでございます。しかし教育現場では、とかく瑣末的、あるいは表層的な対応に追われているといううらみがないとは申せません。

英語教育の改革は、この国内外の大きなうねりの中で捉えて、何のために、どのような目標地点を指向して、この英語教育のいわばビックバンとでもいうべき大変動を乗り切るのかということを押さえる必要があるかと思うわけでございます。

さて、英語教育に対するインパクトという面から考えてみますと、改革をすすめるにあたって、どうしても押さえておかなければならない3つの柱があるのではないかと思います。

第1は生涯学習に対応するということがあります。ステレオタイプな「伝統的な学校教育オンリー」ということだけからは、どうしても脱却しなければなりません。

具体的には、就学前の早期教育であるとか、卒業後の継続教育という、いわば縦軸の教育の延長というものがございまして、また、横軸としては多様な社会教育の広まりなどを無視できません。このようなことを考えて、教育の構造的な改革が現在進んでいるものと受けとめております。

外国語に関しましては、遅らばせながらようやく我が国におきましても、小学校に外国語が導入されるような展開になってまいりました。

第2の柱は国際コミュニケーション能力の育成でございまして、これこそが、まさに英語教育が中心になって取り組む必要のあるところだと受けとめます。

これまでの英米人のいわゆる「民族語としての英語」に加えて、先程のご講演にもありましたが、「国際語としての英語」の役割は、これから日本の生存に関わる重要な問題であると思っております。

しかし、旧来の生産性の低い英語教育のままでは、日本は世界の中で言語的な孤児になってしまうのではないかという恐れも指摘されているところであります。国際的に、特にアジアの近隣諸国ではどのようにこれに対応しているか、などという現況も踏まえていく必要があると思っております。このような広い視野から具体的に考える必要があります。

第3の柱として考えますのは、社会の情報化に主体的に対応できる資質を養うことが必要かと存じます。

今、子どもはますます拡大し、加速化して進展する情報化社会に突入すると言われておりますが、特に英語教育ではマルチメディア化の発展に対応して、どのような教育観・教育法ないしは発想の転換が必要なのかということを考えてみる必要があるかと存じます。

本日は、ただいま申し上げましたような3つのキーワード—生涯学習・国際コミュニケーション能力・マルチメディア化—を踏まえながら、講師の諸先生からメインテーマについて自由なご発言をいただきたいと存じます。

どの一つを取りましても非常に大きな問題でございまして、時間が足りないことが十分予測されるわけですが、今回はお3方をお迎えできた貴重な機会でございますから、結論を急ぐというよりは、フロアからのご意見もちょうだいしながら、大きな展望・パースペクティブをもつ手掛かりを得たい、というのが主眼でございまして。

続きまして、講師の先生の略歴、業績などを簡単にご紹介申し上げます。

飯塚成彦先生でいらっしゃいますが、明治学院大学をご卒業後、静岡県で高校の教諭をなさっていらっしゃいますが、後に米国イースト・ウエスト・センター奨学生としてハワイ大学、コロンビア大学の両大学院に留学され、英語教育学を研究されました。

帰国後、直ちに加藤学園の沼津言語教育研究所長として幼稚園児と小学生の英語教育を開始され、以後30年の長きに渡りまして、いわゆる早期英語教育の実践と研究をされて今日に至る

ております。

この間、ソニー株式会社の教育システム研究室で実際の教材開発をなさるとか、東京で英語教育研究所長や大学の講師などをされ、現在は白鷗大学の教授でいらっしゃいます。

先生は「誰でも英語ができる人になれる」という信念をおもちでございまして、「赤ちゃんから大人まで楽しく英語を覚える」という、いわゆる飯塚方式ということで知られております。何とか日本人の英語に対する夢を実現したいと情熱を燃やし続けておられます。

ご覧のように白髪ではいらっしゃいますが、いつも若々しい英語青年でいらっしゃいます。

著書も多数でございまして、1, 2 紹介いたしますと『0才からのジュニア英語教室』『ぼく英語ができちゃった』とか『英語と一緒に育つ子』、翻訳では、『マザーテレサ』『愛は傷つく』などがございまして。また昨日、これから出版されますという本も贈られました。『イエスの仮説』という非常に興味あるタイトルです。このように研究に実践に活発な先生でいらっしゃいます。

次は福田昇八先生でいらっしゃいます。熊本県のお生まれでございまして、東京大学文学部英文学科・同大学院を修了されて、長く熊本大学で英語・英文学をご担当され、現在教育学部教授でいらっしゃいます。

長年スパンサー研究に携われ、この方面の著書・論文も多数でいらっしゃいまして、日本スパンサー協会の会長もされ、『詩人の王スパンサー』などもまとめておられます。

英語教育に関しましては、先生ご自身の研究と実践から得られた発想・信念をおもちでございまして、それに基づいた英語教員集中研修会を長年にわたって開催され、熊本県を中心に全国的に非常にインフルエンシャルな結果を得られているわけでございます。

終戦直後に、我々も思い出しますラジオ放送のカムカム英語で有名だった平川唯一先生がおられました。この平川先生の実践に関する研究や、ご自身の体験などを書物にまとめておられます。これらの実践から「心で受け止める英語」ということを非常に強調されておられます。これらの実践を含め、先生が教員研修の中でなされたいろいろなご工夫なども含めて、『語学開国』という書物にされておられます。

先生は「日本はいろんなことで進んできたようだけれども、英語が通じないという点では、依然として語学鎖国である」とおっしゃっておられます。

大学英語教育学会の九州・沖縄支部の支部長などもされました。また、先生の発想のもとに中国・韓国・日本の英語学力と学習の実態調査のプロジェクトチームを発足させました。その後6年間、後に続く方々がこれをまとめていかれまして、今年の6月、『このままで良いか、大学英語教育～中・韓・日3カ国の大学生の英語学力と英語学習実態』という、我が国の英語教育や、広く学校教育のあり方に対して厳しい、しかも容易ならざる問題があることが統計的にも、実践的にも示されてきております。

本年の秋でございまして、大学英語教育学会（JACET）の今年度のJACET賞を受けられた

立派な果実となっております。

先生は、たくさん書物を出しておられますが、今年は『アメリカ生活英語入門』とか『平川唯一のファミリーイングリッシュ』などを出されております。これらの件につきましても、お触れいただけるのではないかと考えております。

羽鳥博愛先生でございますが、東京大学文学部英文学科を卒業後、続いて同大学院で教育心理学課程を修了されました。

東京学芸大学で約30年間教鞭をとってこられました。大学で教授としてのいろいろなご経歴や、専門分野の数多いご発表をなさったことはもちろんでございます。

英語教育に関する数多くの著作や論文もございますが、また、ご自身でご講演やデモンストレーションをされるなど、啓蒙活動でも非常に熱心に私どもを導いて下さった方でございます。全国のたくさんの英語教員が直接、間接に先生のご指導をいただいているのではないかと考えております。

現在、文京女子短期大学教授副学長の職に就かれております。数多い公職の中で1、2申し上げますと、現在は語学ラボラトリー学会の会長をなさっていらっしゃいます。そして教育機器やLL教育の普及に努められ、教育機器の本当の使い方はどんなのかを常に探求されておられます。また最近、CALLも増えておりますが、メディアの活用につきましての先進的な役割を果たしておられます。

それから皆様がよくご存知のように、実用英語検定試験というのがございますが、その主催組織である日本英語検定協会の会長に本年から就任されておられます。文字どおり日本における実践的な英語教育の頂点におられて、指導的役割を担っておられるわけでございます。

新しい本の紹介を申しますと、『国際化の中の英語教育』とか『心理言語学と英語教育』『英語教育の心理学』などがあり、また、英和辞典、中学校や高校教科書の多数にかかわっておられます。先生の幅広いお立場から、この情報化社会の進展に伴って、どのような私たちの発想の転換が必要なのか、などについてもお触れいただけるのではないかと考えております。

シンポジウムの進行の手順につきましては、3人の講師の先生方から20分ずつご発表をいただきます。計60分で約1時間ほどとなりますが、その後、わずか15分でございますが、休憩時間を設けさせていただきます。

この間に、質問用紙がございますので、一応効率的に運ばせていただきたいと存じますので、それぞれ質問を書いておいていただきまして、この正面の両横のところに学生がハンドマイクを用意して立っておりますので、その用紙を渡していただければありがたいと存じます。

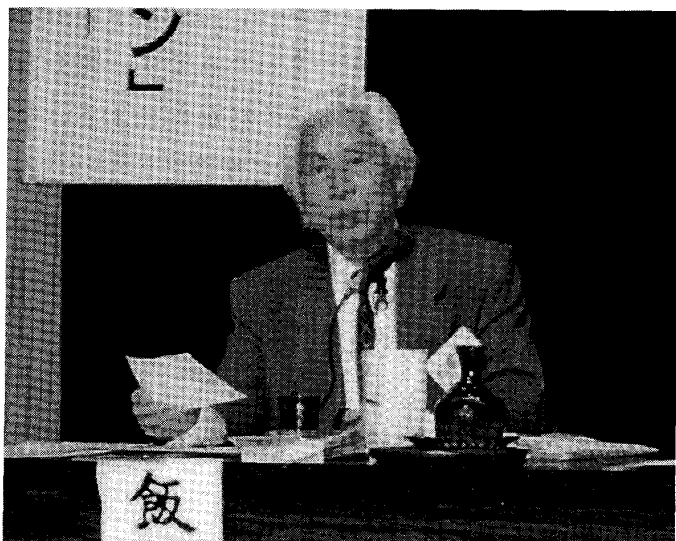
15分の休憩後シンポジウムを再開いたします。3人の講師からただ今の質問も含めながら10分程度で、補足とお答えなどをしていただきます。その後で、25分から30分の時間がございすから、これは全くフリーでフロアから挙手などいただきまして、私どもの討議を深めさせていただきますと存じます。口早に申し上げましたが、よろしくご協力をお願いしたいと存じま

す。

では、早速でございますが、初めのスピーカーといたしまして、飯塚先生、よろしくお願いいたします。お座りになって結構でございます。

飯塚 座ったままで失礼いたします。飯塚でございます。

今ご紹介いただいた岩城先生とは、実は32年前に高校の教員のときにハワイのイーストウエストセンター大学院へ留学するとき、同じ船で横浜からプレジデント・ウィルソン号に乗って参りました。その頃の英語教育とその環境は、今私は大学で教え、また早期英語教育の勉強を



しておりますが、1997年の現在とどんなに違っていたか。そこから、私なりの意見といたしますか感想を述べさせていただきます。すごい変わりようだと言いたいんですが、日本人の英語力は逆行しているんじゃないかという説もあって、その方は後で福田先生からもいろいろ申し上げていただきたいんですが、「われわれ教員はどうだ」ということについて少し申し上げたい。

われわれは難しい試験を通して、イーストウエストセンターに1年ないし2年、アメリカの莫大な奨学金をもらって大量留学させていただいたわけです。その仲間たちが横浜から船に乗って日本から32人行きました。アジア諸国から、全て合わせて百何十人行ったと思いますが、ホノルルへ着いたときに、船ですからアロハ・タワーに着きました。

まず、我々がズラッと陸に並んでいるアメリカの車を見てびっくりしました。我々の仲間、自家用車を持っているような教員はいませんでした。それが学校へ行くと、ダートと学生まで乗って来ている。その車を見た途端、船の上から、ある北海道から来た先生ではなかったかと思いますが、「おお飯塚さん、見てみろよ。あれはみんな外車だぞ」と。未だに覚えてますが、アメリカへ着いて、アメリカの車を見て驚いて、外車だと言ってしばらく我々は「そうだな」なんて言ってて、5、6分経ってから、この野郎ということになったんです。そんな具合で、まさに化石化したような話ですが、未だにその頃の我々の英語力を思い出しますと、英語力とか文化理解、アメリカの事情をどのくらい知っていなかったかと思えますと恥ずかしい思いがします。随分難しいフルブライトとかイーストウエストセンターの試験を何回も受けて、やっと通ったものですから、優秀な学生が来ていたはずであり、私はその中にいてそんなに低いはずじゃなかったんですが、とにかく苦しい、苦しい。

しばらく、1カ月か2カ月する間に、真っ黒の髪が段々白くなってきて、半年ぐらい経ったら、だいぶ上の方が白くなってきました。実は私、今年の6月の末に韓国の学会に呼ばれて行きました。30年前の私のクラスメイトでプロフェッサー・ミョン・ウォン・チョウという向こうでは有名な方なのですが、私30年話したことがなかった方がいます。空港のいっぱい人の中で、向こうから手を挙げている人がいる。「あの人がチョウさんに違いない」と思いましたが、でも私は自信がないんです。ところが、向こうは確信をもって「お前、飯塚だな」と言うんです。“Why are you so sure about me?”と言ったら、“Your gray hair. You had gray hair thirty two years ago!”と言われました。

ここで、私ははっきり申し上げます。私は高等学校の教師を丸9年間し、その前は明治学院で英語をやりました。松本亨の弟子ですから、speakingは随分自信があったんです。聞く方もかなり自信があった。けれど向こうへ行って大学院の授業を受ける、それからELIという英語の特別訓練を受ける、English Language Instituteというところへ行って本当にもういじめられると、岩城さんは、そうではないかもしれないけれど、この中にいっぱい似たような仲間がいますが、本当に胃潰瘍になる人がいます。それから慢性のconstipation—便秘です。私の場合は柔道をやっていたからマッサージをして自分で治しましたが。

それから、円形脱毛症というのがあるんです。私の場合は、もうちょっと複雑でして、白くなりました。32年前、何千人の中から十何人かの英語教師が選ばれていったわけですが、はっきり言ってわれわれの英語力はそういう状態でした。

中にはもっと優秀な人がいたと思うんですが、はっきり私が今ここで申しますと、英語の教師で大変できるはずの人でも、講義など、あまり分からない。ELIというのはいろいろ段階がありまして、下の方から上がっていかなければ、正式には大学院生にはなれないということです。そして、それができないと、途中で強制送還されるということになり、1年後に送り返された人がおりましたが、我々は幸いにして2年近くおらしていただきました。

その頃と今をみますと、私は大学の教師になって14年ばかりなるんですが、何と大学生の英語の力が低いかやということです。これは私の大学だけが低いかと思ったら、他を聞いても大概そうだということです。私は、この1年間は他大学では上智、私学では語学力がトップだと思われているところに出ています。その人たちの実力を聞いてみますと、TOEFLで平均が530。私の大学のトップの学生は、400台なんです。私が3年間鍛えると、だいたい上智の平均点ぐらいに上がったのが例外的にあります。本当に、これは例外的です。ほとんどは我々はTOEFLじゃなくTOEICというのを受けさせるんですが、300点台ぐらいで1年生が入ってきて、そして、1年経って同じ試験をやりますと、だいたい20点か30点下がっているんです。4年間大学教育を受けますと、だいたいもっと下がるんじゃないかと思うんです。そして社会へ出るんです。

これはうちだけかと思えますと、やはりTOEICという実業の方で調べますと、やはり今年、

去年あたりは420点ですから、400点をちょっとを超えていますね。しかし、400点台では、国際的コミュニケーションは全然できないんです。600点でもサヴァイヴァル・イングリッシュとして役に立たない。本当なら800点ぐらいなければビジネスができないはずなんです、いかに我々が頑張ってもサヴァイヴァル・イングリッシュまでいくかどうか—。これは私のところへはだいたい中堅、普通、真ん中ぐらいの学生が目指して来るんですが、そういう状況です。

そして、もっとひどいのは、学生の学習意欲が非常に低いということです。後で申し上げますが、我々はいろいろ努力してやっています。まさに福田先生が後でおっしゃられるような、統計的な数値が、私は実際だと思うんです。

それから、学習環境が非常に良くなっている。はっきり申し上げますと、私どもは平川唯一先生のラジオで、本当に壊れかけた古い、今では骨董品屋にでもないような真空管ラジオにかじりついて、1日3回放送されていた英会話を習いました。それが唯一の本当のオーセンティック・イングリッシュだったんです。私はさらに松本 English を22年間、教員になってからも、アメリカ留学しているとき以外はずっと聞きました。ですから、わずかなメディア、わずかな教材でも必死になって格闘をした。今はもう、私の本がそこにありますが、空から英語が降ってくるんです。私の本はそういうタイトルです。

もう、“English is falling down from the sky. But nobody tries to catch it. No study.”何で君たち、それを利用しないんだと。なかなか利用しません。私が先程申し上げた TOEFL が530点か40点ぐらい。TOEIC で約800点取った学生は、私の言うことを聞いている。4年間やりまして今大学院へ行ってますが、TOEFL では、500点か510点ぐらいです。

そういうわけで環境は非常に良くなっているけれど、どうして我々の力が伸びないのか。まず意欲のなさということがあると思うんです。しかし、私は今日申し上げたそういうご存じのことを言いに来たんじゃなくて、我々の英語教育の捉え方が果たして当を得ているのか。まずそこからやってみたいと思います。

実は、これは羽鳥先生なんかもご関係だと思うんですが、文部省が小学校で英語教育をやるというので、去年中教審の中教小委員会から報告案がきまして、その中で非常に良いことを書いてくれてあるんですが、細かいことは省きまして1つだけ申し上げます。小学生に英語を道具として捉えさせるということ、わざわざ書いてあるんです。私はいかに残念なことかと思っています。私は言葉は道具であると思います。しかし、単なる道具ではない。“Much more than tools.” だと思っています。

今日のマコーネル先生のお話にもありましたけれども、やはり世界を1つにつなぐための言語なんです、これには心と心が結びつかなければ決して世界は1つにならない。単なる言葉の技術だったら、すぐに break になる。むしろ言葉ができるゆえに、非常に誤解が生じていることを皆さんはご存じだと思います。日本でも有名な政治家が英語がものすごくできる所信表明をやった人ですけれども、これがものすごく誤解を招いたことがあります。

ですから、我々は単に言葉ができただけではダメなんだ。私は関係者もおられますから文部省にはっきり申し上げたい。単なる道具として言葉を捉えるということは、そもそも深く言葉を身につけるためには、前提として間違っている。もっと深い意味の、心と心をつなぐためのものであって、単なる技術道具ではないというのが、私がまず強調したいことであります。

世界の共通語とかいろんなことは、もうマコーネル先生おっしゃったので言いませんが、あえて言いたいのは、我々英語教師の中にある英語帝国主義論です。

English imperialism に対する反対論が起こっていることです。私は文部省の中にもいるんだろうと思います。いろんなことから想像します。かなり、政策決定者の中に、英語帝国主義論の人がいらっしゃるんじゃないかと。私はこれはあえて悪いとは申し上げません。かなり理由はあるんです。確かに先程マコーネル先生のお話がありました。インドが植民地になる。日本は植民地にはなりきらなかったけれども、かなり英語によって支配されて、逆に、先程私が言った心と心、心を侵されているという人がいるわけです。そうすると、侵されないようにするには英語を教えない方が良く。覚えられない方が良く。小学生にも教えない方が良く。だとか。こういう理屈が出てくるわけです。この帝国主義論というのは、実はこの前おもしろいことに、日本経済新聞の社説に「あれは的外れである」と、間違いであるとありました。日本は英語なしでは滅びるぞ、ということすら社説に書いているんです。英語がなかったら、日本は英語を使えなかったら、滅びるぞと。ご存じだと思います。後でお話をします。

私はそういう危機感をもって、もう大学の英文科に入ったときから英語と取り組んでまいりました。そういう気持ちを私に植え付けてくれたのは、松本亨先生であります。日本がこれから世界的によくやっていくためには、絶対英語がいるんだ。先程もりましたが、日本が実際に孤児になるというのは、今朝のニュースでも見ました。貿易摩擦ですか、船のことで寄港をさせないとか、荷役業者がアメリカでストをやって、それを政府が保護するようなこと。これらの厳しい状況がいくつも続いている。

これは英語のベテランが交渉していたそうなんです。やっぱり英語は技術だけじゃない。言葉を通じて英語を使っている人たちは、決してアメリカ人、イギリス人だけじゃありません。現在はもうアジアの国々が全部、英語を日常的に、ビジネスや政治で使っているわけです。そういう時代にあって、英語帝国主義論なんてことを有名な大学の教授まで言ってますから、ほっといて良い問題ではないと私は思います。私は英語帝国主義論は間違いである、的外れであるという日本経済新聞社説6月20日の記事に大賛成であります。

その次ですが、テスト論というのをはしりの頃を踏まえて見ていきます。

私はコロンビア大学へ行って、Teaching English as a Foreign Language というのを勉強しましたけれども、そういったものを日本へ戻ってすぐ使えたかという、全く使えませんでした。むしろ全く忘れた如く、やらざるを得ないような授業、高等学校の受験コースを教えて、それでもうくだらないから半年で辞表を書いて幼稚園の教師になりました。

幼稚園に行きますと、教科書も何もありません。標準語も何もありません。全部自分で作っていきます。けれど私の固定観念を子どもにあてはめると、すぐ反発が出てきます。この中の先生方で幼稚園の子どもを10分間教えられる方がいらっしゃいましたら、私は脱帽します。3分でももちませんよ。小学生も同じようなことですが、はっきり言って、つまらないことをやったら、教え込もうとしたら、「先生、オシッコ」と言うんです。英語で、“I go to the bathroom”と言うんです。1人が言うと、他の子が「先生、オシッコ」と言う。「お前、水を飲み過ぎたんじゃないか」なんていうようなことを初めは考えたら、違うんです。やはり「先生の授業、おもしろくないよ」というサインです。

“Me, too.” “Me, too” と行っちゃうわけです。

ところがその子どもたちがおもしろいというか、子どもたちの目的にかなったことをやりますと、幼稚園の園長は「20分以上はまかりならん」と言っても、終わったら子どもが抗議をするぐらい、「もっとやってくれ。飯塚にもっとやらしてくれ」と。私は1時間幼稚園で授業をやったことは、もう何回もあります。全然「オシッコ」なんていう子はいないようになりました。ですから、それはやはりこちらが子どものニーズ、“What they want” “What the children want”をつかんで、それを与える。

はっきり申し上げて、私はハワイでも教えてもらわなかったことをやりました。今でいうイマージョン・プログラムと言われてはいますが、英語で保育をしたわけです。つまり、幼稚園の無免許の、保母ならぬ保父になったわけです。幼稚園の中に入ったときには、まず、やはり保育を、つまり幼稚園教育を英語でやらせていただいた。それで、幼稚園の園長代理にも納得してもらった。

小学校でやったときも、教えこもうとしたらほとんど駄目だったんです。結局は成功したのは教えない教育です。

この間、韓国へ行ったときも、“What is the best method of teaching English to children?”と聞かれたものですから、“The best teaching method is not to teach.”と言ったら、バァーツと拍手がおきた。何も教えないことが、“the best method”だ。

全部授業が始まる前に準備して、子どもが食らいつくようなものを用意しておいて、そして子どもがそれに食らいついて、勝手に英語をピックアップするようにして、教師は側で見ていること。必要があれば子どもと話をします。これが最も成功した授業法です。

子どもは必要なものを一生懸命に工夫して、それよりもこっちが教え込むようなときは、もうそれを大きな袋にポカポカ入れていくんです。そして使っている間に飽きたら、次のネタを出したり、手品のように次々やるわけです。

ですから、要するに、私が教材をいっぱいもって行くだけじゃなくて、私自身が教材。必要ならば子どもが私に食らいついてきて、私と一緒に英語で遊ぶ。向こうから日本語でしゃべられても、こっちは絶対日本語は使わない。英語でやっていると、彼らも段々段々英語が分かる



いろの国へ紛れて、立ち去ったということになっているんです。クラークさんはどこかへ馬に乗って行って、立ち止まって送ってきた人たちに、“Boys, be ambitious!”という言葉を残したというわけで、これが小学校の教科書にも載って、全国的に知られるようになったんだと思うんですけれども、ジェインズ先生のことは調べてみるといろいろおもしろくて、英語教育の根本にかかわることがあります。

ジェインズはアメリカの陸軍士官学校卒業なんですけれども、たった1人で全く英語が分からない子どもたちを集めて、今でいえば中学1年生ぐらいなんですけれども、結局5年間、その自分が士官学校で使ったような教科書を使って、あらゆる科目を教えた。だから専門科目から数学、皆英語で教えてしまったんです。そういう奇跡的なことが行われたわけです。これはまだ学校制度というのが始まる前のことだったんですが、最初の1年間は英語ばかり教えて、それも全く聞き・話すから始まったわけです。そして、できない子供は明日から来なくていいと、そういう権限まで与えられた先生で、どんどんやったのです。

そのことは、私も熊本県生まれですけれども知らなくて、最近になってといいますか、熊本に行ってから、教育の関係で調べて行って、大変参考になるなと思ったんです。

私が中学校1年生のときの8月に戦争が終わりましたが、ほとんど非常時体制といって学校の授業なしで、農作業ばかりして1年生の半ばまで来たんです。それからアメリカ軍が入ってきて、こういうことではもう英語が話せないと話にならないと思ひまして、どうにかして英語を話せるようにならないといけないな、という感じを自分でもったわけです。

ちょうどその終戦の翌年から平川唯一という人がNHKで英語会話の講座を始めました。私、最初の1年間は知らなかったんですけれども、2年目に私が中学校の3年になる頃ですが、それからずっと毎度聞きまして、高校卒業するまで聞いたんです。4年間聞いたわけですが、その後、ちょうど私が卒業する年に、この放送自体も終わったんです。

おかげでといいますか、高校を出たときには英語がしゃべられるようになりましたので、もう英会話は卒業したと思っていたわけです。

松本亨先生がその後22年間やられたんですけれども、私は1回も聞いたことがない。それはもう聞きたいという気も起こらなかったもので、他の文学の勉強ばかりしていたのです。またこれに関連して話がありますけれど、そういうのは後になります。

大学を出ましてから熊本大学に行きまして、そこでスペンサー研究というのを始めたんです

けれども、ここでやり始めました。*Fairy Queen* という作品の翻訳が最初好評だったものから、とうとうそれを続けることになりました。皆さんはご存じないでしょうけれども、3万5千語以上ある厚さです。あのころは寝ても覚めてもこればかりやっけていて、日曜日になってホッとするという、そういうふうなことでやっておりました。

それが10年間ぐらいたったところで、また事件が起こりました。これは羽鳥先生あたりとも一緒に、先生も同じだったと思いますが、語学教育振興会というのが東京にできて、日本の産業界からの要望だったそうですけれども、「日本の英語教育は全然進んでない。もう少し何か役に立つようなことをやるべきじゃないか」というようなことで、語学教育振興会がちょっと金を出して、全国の地区の大学に集中研修会なんかをやったわけです。

私も熊本大学の夏休みにそれをやったんですが、その後、その中から5人が選ばれてアメリカに派遣されたんです。その語学振興会の話が始まった基になった人がライシャワー元大使です。その時は大使を辞められて3年たったときだったんです。ハーバード大学の研究室に訪ねて行きましていろいろ話を聞いたんですが、最初の30分間はいろいろな話をされ、その後、後半になって「自分は大使のときにいろいろやってきたけれども、英語教育については何の貢献もできなかった」と。「何も、と言われるのは何ですか」と言いましたら、「結局、日本の英語教育は、自分が大使をしている間少しも進歩しなかった」と。「それで何をすべきでしょうか」と聞いたら、「中学校の英語の先生を英語をしゃべれるようにすることが一番大事です」と言われるんです。私は単純にそれに飛びつきまして、帰ってから、熊本県の教育委員会に1人乗り込んで行って、「ライシャワー先生がこう言われたから、ひとつ何かやろうと思います」と。そのとき2、3日考えて、「熊本県英語教員集中研修計画・4年計画」というのを私はつくって行ったんです。

それは何かといいますと、これもライシャワーさんの勧めですが、集中研修というのは、学校もみんな休みにして、1カ所に集めて、最低2ヶ月間はやらないと、ちょこちょこ研修するぐらいじゃダメだということだったんです。

それで思い切った考えですけれども、2ヶ月間学校を休みにしてもらって、先生が参加している間は、その学校の授業は補充教員といいます別の先生を雇う。そういう話を研究員とつけてまして、あの頃は非常に日本の財政は今と同じで厳しい状況で、なかなか金を出してくれなかったんですが、どういうわけかそういうような話もまとまりました。それから、アメリカの方から1万ドルでました。あの時は360万円だったんですけれども、相当な金でした。

そして、アメリカ人の先生を2人雇いました。その後、そういうアメリカ人の先生を雇うこととか、その先生の宿を探してやることとか、受講者を集めるとか、補充教員を探すとか、そういうのを全て私1人でやったんです。

この研修会を2ヶ月間、5月・6月で1つ、7月・8月で1つというふうにならざるを得ない。年に5回やりまして、1年に20人ずつ100人。その頃熊本県に600人ぐらいの英語の先生が

おりまして、それで3分の2ぐらい選んでいたんだなということで、4年計画でやったんです。結局その400人まではいきませんでした、300人ぐらいまでやりました。これが英語教育に非常に深く関わる私のきっかけだったんです。

まずは先生が変わって英語教育が変わった。英語の教え方が変わった。そして、それを習う生徒が変わった。我々の目的は生徒ですから、そういう生徒が育ってこなければならぬ。それによって日本の英語教育が変わるといふ、そういうふうなことでやりました。

先程のライシャワー先生の言葉によると、「日本には、(私たちにすれば歴史の専門分野ですけども)自分と英語で議論のできる歴史の専門家はほとんどいない」「外国に行くときたいい英語で通じるが、日本は歴史を専門としている人で、専門のことを英語で議論できる人はほとんどいない。」そういう意味では閣僚も含めて、日本はその頃ちょうど明治以来100年経っていたんですけど、まだ鎖国である。

それで、私が語学鎖国というのをひっくり返して、『語学開国』という本を書いたわけですが、それにちょっと詳しく書きましたけれども、だいぶこれで英語教育も変わりました。この研修は、私が全く個人的な人力でといたしますか、サービスで、熊本大学の授業は全く他の人と同じだけ、6コマか7コマか持ちながらやっているんです。

皆そのことを分かっている、一生懸命勉強しました。それから、その頃来た外人の先生たちも、自分たちがこうやって日本人の先生たちを生徒にして教えられるというのは非常にありがたいと言って、両方とも給料は安く雇ったんですけども、それでも一生懸命やってくれまして、非常に成功した研修が行われたわけです。それを4年間やりまして、2ヶ月間のを18回やりました。それから、あと夏休みだけ5週間の研修会というのをやって、それが合計20年間、1990年まで続けたんです。始めるときは先生が変われば日本の教育は改革されるだろうと思ったわけです。しかし、ここが理屈と実際の違いです。そういう先生がどンドン現場に帰っていき、400人も帰っていったら相当変わっただろうと思われるでしょうが、あまり変わっていないです。どうしてかといいますと、帰っていく人たちは「自分は変わったけれども、大学の入試には何もそんなこと教えなくて点数にならない。もう1点でも点数を取らせるのが我々の勤めです」とか言って。そういうことで、「今度は入学試験にそういう問題を出して、そういう力に点数をやるというふうにしていかなきゃいけない」と真剣に考えるようになりました。その後、大学入試センターなんかの委員なんかをしまして、そういうことを大学入試センターなんかで取り入れるというような話もしていたんですが、結局、個別試験といいますか、それぞれの大学でそういう試験をやらなくてはいけないだろうということだったのです。これが皆さんご存じのとおり、東京大学は10何年前から取り入れました。その後いくつかの大学では検討中ですが、熊本大学はやっと今年の4月から半分の学部で取り入れていまして、そして来年の2月に行われる試験からは、全学部で取り入れるということになったんです。これは、100点満点の1問をこういうようにして、最初から25点という配点でいくんですけども、北

海道大学も取り入れ始めたということです。今のところ東京大学と熊本大学、南と北で1つずつということで、そういうのが広がって、大学入学試験で評価されるというふうな時代が段々と近づいてきたように思います。

それで、そういうふうな成績としても段々力を入れております。もちろん熊本県の学校は非常に熱心にやっております。今年からそういうような学生が半分入ってきたわけですが、実際に入る前の成績が悪かったんです。それを統計的に調査してみようというので、去年の学生ですけれども、1年生に入ったばかりのところで、1つの学部から1つのクラスを選んで、TOEFLを、受験料は大学の方から100万円もらってやったんです。その結果は、熊本大学の平均点が410点でした。医学部あたりで444点でしたか、一番低いところは390何点なんですけれども、平均点が410点です。

ご存じだと思いますが、この TOEFL テストの得点は、本部の統計によりますと、日本は412点です。全世界の平均は522点だったと思います。中国が553点、韓国が510点になっています。日本はほとんど伸びていないのです。韓国なんかは日本よりも下だったわけですが、今はこれだけ伸びてきています。これは点数だけですから、よく分かりませんが。

ずっとやってみまして、先生を変えて、そして今度は入学試験にもそういうのもってくる、どんどん話せるようになるのかということなんです、それがまたもう1つ問題があって、結局今のような学校でやっているような三人称単数現在とか進行形とかそういう文法項目ですとやっていっては、これはなかなか上手にならない。

それで私が考えたのは、やっとな年間にこの2、3年前に考えついたんですけれども、日本に来ている外国人がたくさんおりますが、この人たちは皆日本語をしゃべれます。そして「私は日本語がしゃべれますが書けません」というでしょう。どうしてそれが英語にはできないのか。「英語をしゃべれますけれど書けません」という日本人がいてもいいはずなんです、そうはいかない。ここが問題です。

ですから日本の学校では、すぐ綴りを覚えさせます。綴りができないとやったことにならない。できたことにしないという、そういう評価方法をやっている。ですから、結局指導理念そのものが間違っているんじゃないか。まず、しゃべられるようにする。私は生活英語とか平川先生の語学、日本人の家族が話す言葉を、英語にしてそれを覚えたわけですけれども、それでいきますと、そういうふうな実際に家で使っている家族英語、それを覚える。身近なことをみんな英語で言えるようにして、そのうちにそれをどう書くのか、どういうふうな文法となっているのかということです。文法を教えるからこういう規則があるからこういうふうな話すんだというのは、非常に頭が良い人だけに通用すると思うんです。そういう人が1クラスに10人ぐらいいるわけです。1割ぐらいいるでしょう。しかしそれ以上はいない。それをうまくやっていたらいかなければいけないということで、いろいろ考えたところが、結局私の英語の原点であった平川唯一さんの家族英語がやっぱり日本の21世紀の英語教育の多くの原点になるんじゃない

か。まずそれを覚えさせるということになったわけです。

そして、また教科書を見直してみますと、1ページに最初から現在形、未来形、進行形なんていうのも出てくるんです。だから、これを追うごとにやっていたら、どうしようもないんです。非常に難しい。しかし子どもがやっているのはやさしい言葉でしょう。これが小学校の英語教育とも関連すると思います。

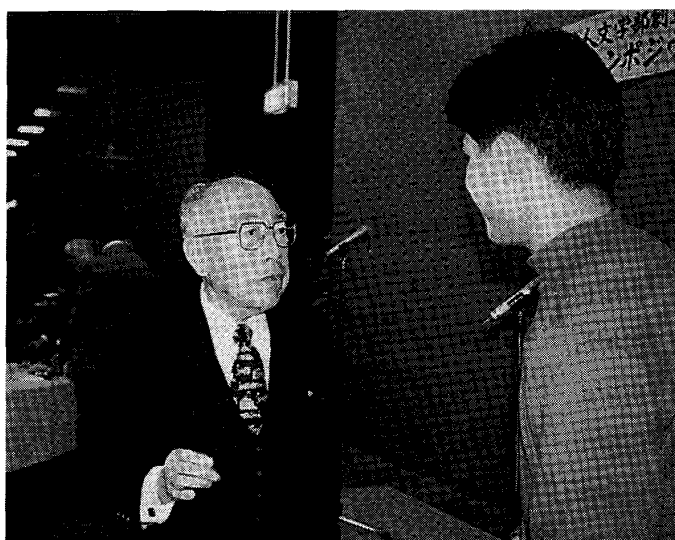
私の時間は過ぎましたので、また、次の時間に補足いたします。私はこれから、だいたい今英詩が専門ですので、もう少し英語教育に本格的な英詩的な要素を取り入れてもらいたいというふうな主張もあるんですが、それは後にさせていただきます。

岩城 ありがとうございます。

語学開国に関連して、家族英語などのことで少しは道が開けてきたようで、もっと伺いたいところがございますが、これはまた後程にしまして、一応福田先生の発表をここで打ち切らせていただきます。次に羽鳥先生、お願いいたします。

羽鳥 私が申し上げたいことは大きく2つに分かれます。1つは何でマルチメディアというのが有効なのかということです。それからもう1つは、マルチメディアの各論でいろんな例を少し申し上げて、少しずつコメントしたいと思います。例えばCALLについて。あるいは電子辞書といわれているようなもの。あるいはEメール。それから Distance Education といわれているようなもの。そういうようなものについてコメントします。

まず最初、マルチメディアといわれているものがなぜ役に立つのかということなんですが、これに関してはおもしろい話があるんです。私が大学のとき習った先生に、波多野完治という人がいるんです。その先生は最終的にはお茶の水女子大学の学長で終わった人なんです。まだ現存、生きていらっしゃるんです。その先生は、『文章心理学』という本を書いた先生で、文章



心理学という本は、その単行本は今や絶版かもしれないけれど、どこかの文庫本の中に文章心理学というのが残っているんです。その波多野先生なんですが、先生は『文章心理学』というのを書いたので分かるように、心理学者ですけれども言葉というものに非常に関心があったんです。

その波多野先生があるとき『英語教育』という雑誌で、これは皆さんはご存じの今大修館から出てます。その当

時は、確か研究社だったと思うんですけども、その英語教育の雑誌に知能指数が115以上ないと外国語が上達できないということを書いてあるんです。これは波多野先生は自分の経験から考えて、知能指数いわゆるIQが115以上ないと外国語が上達できないというのを書いたので、全国の先生たちが一生懸命になって英語教育をやっているのに、波多野先生は英語教育もやっていないくせに、知能指数115なきゃ上達できないなんて言ってもらっては困ると大変腹を立てたんです。それは昭和32年で今や歴史的なことですけど、そういう事件があったんです。

ところがあるときアメリカの心理学者で、やはり言語教育に関心であるキャロルという人が来たんです。そのキャロルさんが波多野さんと座談会ではなくて話し合いをしたことがあるんです。そのときに波多野先生は元来の自分の持論である知能指数115という言葉が話題に言い出したらしいんです。キャロルは、普通の教室で授業をやっていたら、多分そうでしょうと。ただし視聴覚機器を十分に使ったら、もっと知能指数の低い生徒でも英語学習についてこられるんじゃないかと答えたんです。それで波多野先生はその話し合いが終わった後で、私たちに向かって「参ったよ。1本キャロルにやられた。知能指数115以下でも視聴覚機器を十分使えば十分ついてこられるというふうに言ってたよ」ということを言ったんです。それが、当時は視聴覚機器というような表現でしたけれども、とにかくそういうものを使うということ。視聴覚機器は今では余り流行っている言葉ではないけれども、マルチメディアの基みたいのものです。そういうことをキャロルが言っていたということ、それをまず第1に考えていただきたい。

要するにマルチメディアを使うと、いわゆる英語があまり得意でない子、あるいは、ひょとしたら頭が悪いと言われている子、そういう人たちでも結構ついてこられるようになるんじゃないか。それはなぜだろうかという、要するにいろんな感覚に訴える、人間の五感と言われているもの、聴覚とか、視覚とか、嗅覚とか、味覚とか、触覚とかいう五感と言われているもの、その五感のなるべく多くに訴えた方が、物事は分かり易くなるというんです。

それで、私がよく言う例ですけども、レストランに行っておしょう油とソースが机の上に置いてある。そのとき、どうやって区別するか。おしょう油もソースも同じような色をしていて、同じようなビンに入っていると、どちらがしょう油でどちらがソースか分からない。そうすると、目で見ただけでは分からないんです。女の人の中には臭いをかぐ人がいます。「これはおしょう油だ。これはソースだ」と臭いをかいで判断するんです。ところがそのとき、仮に風邪なんかひいていて鼻が詰まっていたとする、どうするかというと、今度は手のひらにたらして舐めてみる人がいます。そうすると、これではしょう油だとかソースだとか分かる。ということは、感覚に多く訴えれば訴えるほど、いろんなことが分かり易くなるということです。

だから文字なんていうのは最も抽象化されていて、分かり難いものなんです。だからそれだけでやっただけなら分かり難いけれども、それに対して画像を与えたら、もっと分かり易くなるとか、そういうことがあるわけです。だから人間の感覚の、いろんなたくさんものものに訴え

ば訴えるほど分かり易くなるということです。

私はよく例に出すんですけど、お城、castle という単語を城と訳すんですけども、それだけでは本当は日本の生徒にはどういふのが castle か分からないんです。というのは、例えばこの間私の教え子でイギリスへ今行っているのがいて、それでイギリスへ行ったらスコットランドへ行って、エジンバラでエジンバラ・キャッスルを見てこいよと言ったんです。それで彼女が行ったんです。どちらかというとな彼女は感情を露わにする学生ですから、手紙にも「先生が行け行けというから行ったら、エジンバラ・キャッスルは私が今まで見たお城の中で一番素晴らしい」と手紙に書いてあるんです。大きなエジンバラ・キャッスルの絵ハガキを送ってきたんです。

それで彼女が日本のお城からは想像もつかなかったんですが、日本で城と言ったときに考えるのは、例えば有名なのは姫路城だとか大阪城だとかというのがあるでしょう。そういうお城のイメージと、西洋のお城のイメージは違うんです。それはいくら口で説明しても分からないんです。ところが百聞は一見にしかずとよくいうけれども、絵ハガキを見せたり、スライドを見せたりしたら、これが西洋のお城、これが日本のお城だというとなスッと分かる。抽象化されている言葉だけでは分からないけれど、画像を見せれば分かる。これは1つの極端な例かもしれないけれども、いろんな感覚に訴えれば訴えるほど分かるんです。

もう1つ例を挙げますと、例えば、いろいろ等高線の書いてある地図を見て、どこが高いかどこが低いかというのをスッと分かる人は、かなり地図を見慣れている人です。地図で高いか低いかでもう少し分かり易いのは、色がついている地図。土地の高いところは茶色が濃くなっている。低いところは緑が濃くなっている。そんなような地図ですと、もう少し分かり易くなる。もっと分かり易いのは、博物館なんかによくあるような土地の模型図です。縮尺されていて、高いところは高い、低いところは低い。一番分かり易い。なぜかというとな、現実に近いものほど分かり易いから。地勢図となっているのは、模型になっていけば、高い低いなんて目の当たりに分かる。ただ縮尺されているだけ。地図なんてのは分かり難い。しかも色がついてなくて、等高線だけが書いてあるのはとても分かり難いのです。

だから、現実から離れれば離れるほど、抽象化されていけばされている程、分かり難くなるというわけです。だから抽象化の度合いを低めてやって、現実に近づけてやれば、いろんなことが分かり易くなる。それがいわゆるマルチメディアの効用の一番の基です。マルチメディアを使えばいろんなことが分かり易くなる。したがって頭の悪いといわれているような子でも、ついてきやすくなるということで、それが第1点。

それから第2点は、マルチメディアは時間とか空間を超越させてくれる。よく大げさに時空を超越するなんていますが、そういうことです。

例えば、時間を超越させてくれるので良い例だと思うのは、スローモーションと言われているカメラで花が開くときの様子を、花が段々どういふふうにして開いていくかなんていうの

を、いくら説明を受けてもなかなか分からない。ところがスローモーションカメラをその花のところに置いて、非常にゆっくりゆっくりカメラを回しているわけです。そうすると花が何時間もかかかずずっと開いていくのが、スローモーションのカメラに写る。その後で普通の速さで写すと、短時間で花が開いていく様子が分かるわけです。これなんかはまさに時間的なものを超越させてくれたんです。

それで空間的なものを超越させるというので言いますと、例えば、つい最近、宇宙で太陽よりも大きな星があるというのをアメリカの天文台が発見したんです。その星はいかに大きいかということ、太陽から始まって火星ぐらいまで含んでしまうぐらい大きい星だということです。それはアメリカの天文台、その望遠鏡はもちろん大きいんです。直径だけだって60センチあるとかいうので、そういう望遠鏡です。そんなの我々が普通に肉眼で見えていたら、いくら見ても分からないんだけど、向こうからきた光か電波みたいなものを捉えて、それを視覚的に分かるようにした機械を使うと、いろいろなものに時間、空間が超越できるということです。時間・空間を超越すると、かなり現実感が出てくる。今、バーチャル・リアリティーとよくいいます。あれは、例の一番有名なのは、たまごっちです。近頃もう下火になったたまごっちで、子どもを育てるのばかりをやっていると、おもしろくて一生懸命になった、夢中になったという。あれなんかは、子どもを育てる楽しみを、あの変な小さい機械で少し体験するというようなバーチャル・リアリティーといいますけれども、そういうことをマルチメディアはやらせてくれるということ。それが2番目です。

3番目はマルチメディア的なものを学生に開放すると、非常に興味をもつ。それで先生が一方的に教えたり、先生だけが機械を操作してやっているよりは、はるかに夢中になるということです。

例えば、私も今の学校で英会話のクラスをもっているんですが、その英会話のクラスで私が一生懸命テープレコーダー聞かせても、テープレコーダーかけると話をしだすのがいるんです。これはせっかく音声を聞かせてやろうと思って、テープを聞かせるからねと言って、テープを聞かせると話をするんです。腹が立ってしょうがなく、非常にしゃくにさわるので、「これからはテープレコーダーを3つもってくるから、グループに分かれてみんなで代わりばんこに操作してやるんだ」と言ったら、そのときにグループに分かれて誰かが操作してやると、うんと一生懸命やるんです。しみじみ彼らに機械を開放してやらせると、実にうまくやって、夢中になるということが段々分かってきました。そんなことがあって、マルチメディア的なものを学生に操作させたりすると、本当に興味をもってくれる。興味をもてばおもしろがって一生懸命やるという。

そんなことがあって、少なくとも3つの理由、マルチメディアを使うと物事が分かり易くなる。2番目はそれで随分いわゆる頭の悪い人たちも救ってやるとか。それからもう1つは、学生が興味をもってくれるという、そういう意味でマルチメディアというのは大変効果があるん

じゃないかということです。

今度は少し各論的なことを申し上げますけれども、近頃電子辞書というのが流行ってきたのをご存じでしょう。私があるとき英語教育の講習会に行きましたら、高校の先生から質問が出て、その先生は「うちの学生は近頃電子辞書というのを持っているんですけども、先生はどう思いますか」と聞くんです。最初にそう言われたとき、私は電子辞書なんか、そんなに高校生の中で流行っているのかと思って愕然としたんですけども、その先生は苦みばしたような顔で「あんなもので本当に字引が引けるはずがない。電子辞書をどうしたらいいんでしょうかね」と言うんです。それで電子辞書とはどんなものかと思って、実際に業者とコンタクトを取って見せてもらったら、案外私が考えてきたより良いんです。私は最初字引なんていうのは、あることを引いて、前後を良く見て、例文なんかもじっくり見て、だから辞書なんて、じっくり見て引くものだと思っていた。電子辞書みたいなものでスッと出てきて、その必要のところだけちょっと見てなんていうのは、最もけしからないと思ったんですけども、その私に質問した英語の先生もそう思ったかもしれない。

ところが今は電子辞書が段々改善されてきた。それで学生はそれだけ興味をもつんです。普通の字引は一度も引いたことがないというようなのが、電子辞書だとちょっと引いてみる。そんなことがあって、これはひょっとしたら、今までの我々の観念と頭を切り換えて、電子辞書を認めてやる。その代わり、不便なところや何かをどんどん生徒ごとに注文を出して、いろんな操作ができるようにするとか、そんなことを考えていったら電子辞書も使い道があるのではないかという気がしています。

それから行政。よく問題になるのは、今日午前中皆さんが見学されたという CALL です。コンピューターを大いに活用しての英語指導ですけども、これは今やもう生徒の多様性に我々は応じきれなくなっているんです。私の学校で、今文京女子短期大学という学校にいますけれど、学長先生が何て言ったかといいますと、ある問題で「皆さん、できない子をほっといてはダメです。だから英語のクリニック・クラスをつくれ」と言うんです。学長先生が考えたのは、できない子をできるようにしてやる。いろいろ能力別編成みたいなことを考えなさいというのが頭にあったのです。

ところが、先生たちの中で話し合っていると、もう仮に3段階のをつくっても、一番下の段階だけ考えても、非常にいろいろなものがあるということが予想できるので、分けたって分けきれないというようなことを先生方が言って、それでだいたい無理矢理分けて、できないクラスの中に入れられた生徒はやる気が無くなっちゃうだろう。だから学長も言っているけれども、能力別編成みたいのはどうしようかなと言った。それで先生方も逆らったまま、いくら分けたって分けきれない。ものすごく生徒の能力は多種多様だと言うんです。

これは私も実際に痛感したことがありまして、あるときに、学生に少し読むことの速読のおもしろ味を味合わせてやろうと思って、教科書を与えて、それで「どんどん読み進みなさい。

一斉授業はしない。私の方で説明するという授業はしない。どんどん読み進みなさい。1章終わったら私のところに面接に来て、それで、私が質問してその答えでその章が分かっているかどうかを判断して、OKといわれたら次へ進むというふうにして、各自どんどん読み進みなさい」とやったんです。そうしたら、なんと3週間でその教科書を全部読み終えた者がいるんです。そうかと思うと、1学期全部終わった—ということは14週ぐらい過ぎても、まだ2課しか終わらない子がいるんです。それで、そのときのクラスは40人ぐらいなんですけど、たったそれだけのクラスの中に、非常に生徒の違いがあるなというのが分かりました。

そういうふうに、確かに、考えれば考えるほど生徒のレベルが違う。そしてその多様性に感じられるのは何かというときに、私たちの能力ではもうやりきれないと思うんです。先生が1つのクラスに2人いるというようなことを考えても、とても応じきれない。3人いたら間に合うかという、それでも応じきれない。それではどうしたら良いかという、結局コンピューターにいろんな教材を入れておいて、それで生徒にどんどんコンピューターを操作させて、練習させて、そしてそこで「これやって。良かったら次の人。これやって良かったら次の人」とかいうようなことをやらないと、とても間に合わないんじゃないかという気がしています。

そして、実は、業者の名前をいってしまうのはこういうところではあまり良くないかもしれないけれど、参考までに申しますと、TDKというテープのメーカーがあります。そのTDKがコンピューター用の教材を作っているんです。英検受験対策という講座で、英検3級受験用のコースとか、英検準2級受験用のコースとか作ってまして、それがあそこで出ているソフトの教科の中で非常によく売れている。先生が自分の学校でソフトを買ってきて、生徒たちにやらせるんです。それで、それを生徒たちにそれぞれにやらせると、生徒は自分の速さで進んで、例えば、ある文を書いてみてそれで良いと次へ進む。また次へ進む。ところがうまくいかないときは、もう1回やれとかなんとか言って指示が出てきて、どこが間違っているんじゃないですかという指示が出てきてやるとか。そういうのをTDKは作っているんです。それは私が実は関係したものだから内容を良く知っているんですが、それ式なことをコンピューターにいろいろと組み込んでおけば、生徒ができます。読解についてもある程度読んで、それで質問が出て分からない。ではこの設問が分からないのはどこのところを読み返しなさいとか、何かそういう指示や何かをできるようにしていれば、かなり突っ込んだ読み方ができます。ですからうまく教材を作れば、CALLは大変効果を発揮すると思います。

ですけれども、問題は、私が今言ったTDKの教材を作るのに大変時間がかかったんです。下請けの原稿を書いてくれる人がいて、それを業者がコンピューターに合うように書き直して、そして私のところへ持ってきて監修してくれというので見て、英語的な意味から、あるいはコンピューターの機械に乗るかどうかの点から見て、大変長いことかかったのです。そんなことを考えると、本当に役に立つ教材をどのくらい作れるかということが重要です。CALLは今やいろんなところでやっているんです。この学校も今日見せていただいたように、いろんな

ことを、こういうことができるのかということが分かったと思うんです。今年の夏、LLAの、LLAというのはLanguage Laboratory Associationというんですけれども、そこではLLだけではなくて、そういう、今やマルチメディアのことを盛んにやっています。

そこである部会があって、そこでCALLのことを研究発表した人が何人かいますし、それから東京都内でもいろんな研究会をやると出てきて、CALLのことを盛んに発表する人がいます。あちこちでやっているんですけれど、皆さん方は長いコースまで作ってないのが多いんです。

例えば15レッスン作るとか、あるカリキュラムを作って15レッスンやってくれば良いんだけど、1レッスンだけ作って「こういうふうに使えますよ」と得意になって元気に発表して、けれど1レッスン作るんだったらだめだというんです。ですけれど、良いアイデアですけれど、それを例えば高等学校生用の教材というので、高等学校のある学年のことが修了できるようなコースをつくるというのは大変に大変で、手数がかかる。CALLは確かに使い道の価値はあるんだけど、教材を作るのに対応できるかどうかと、これを少し考えた方がいいんじゃないかと、そんなことを今感じています。

それから今度はEメールです。Eメールというのはご存じのようにコンピューターで接続して外国やなんかと通信ができるし、お互いに通信ができます。それで、非常に興味をもちます。

例えば、東京都のある私立の高等学校、あまり学力レベルが高い学校じゃないんですけれども、どういう訳か知らないけれども、ルーマニアとつながっちゃったんです。ルーマニアとEメールで文通をして、それで向こうもあまり英語が上手くなく、こちらもあまり英語が上手でなくて、あまり焦らないで済む、しかも、いろんな情報が入るというので、大変喜んでいるんです。そういうのが1つの例ですけれども、大学なんかではもっとやっているのもあるんです。例えば、東大の教養部でもってEメールを活用して、アメリカといろんなことをやりとりしているとか、そうするといろいろ我々が想像しないようなことが起こってくるんです。

例えば、向こうから来た手紙に、「大学で結婚している学生はどのくらいいますか」などと、学生になるまでは今まで考えたこともなかったことを向こうが質問してくるとか、それから、我々が今中国とか北朝鮮とかの問題で悩んでいるんだけど、すると向こうでは「中国のことをどう思いますか」なんていってくるんです。それを聞いてEメールでやりとりして、「やっぱり国際的に考えると、いろんなことが出てきますね」なんて学生が言っている。

だからレベルの高い学生はレベルの高い学生で、低い学生は低い学生で、いろんな得ることがあるので、Eメールというのは興味を起こすには非常に良いのではないかと。少しぐらい英語が下手でも、先生が手伝ってやってやらせると、大いに学生の動機づけになるんじゃないかという気がします。

岩城 先生のお話をまだまだお聞きしたいんですが、先生のお話自体が私もうバーチャル・リ

アリティでなくて、いわばオーセンティック・リアリティーな話でございます。ありがとうございました。

一応ここで15分休ませていただきまして、その後、今の補足とか皆さん方からお寄せいただいた質問用紙なども集めて、それを基にしながらということで進めさせていただきたいと存じます。

したがって、ほんの少しの息つくだけの休憩時間でございますが、40分頃から後半を始めさせていただきます。

では4時40分頃まで休憩させていただきます。

及川 …後半の司会を務めます及川でございます。予定しておりますように、先程皆さんにお願いいたしました質問票が届きましたので、その質問に答えていただく形で、先程のお話に付け加えるということで、講師の先生方から10分程度ずつお話を伺いたいと思います。その後、フロアの方からの質問あるいは講師の先生方御3人のお話し合いという形にして進めていきたいと思います。時間が非常に短くて申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

飯塚 私に対していただいたご質問は、「松本亨先生の構想および授業で学んだことを教えてください」ということです。どなたか分かりませんが、非常にありがたいご質問です。私が今日お話をしたこと全体と関連があるのですが、羽鳥先生と福田先生とも関係があるかもしれません。私は羽鳥先生、福田先生の言ったことに100%以上賛成です。福田先生とはちょっと意見が違う点もあるのですが、羽鳥先生のマルチメディアのことも大賛成ですが、しかしメディアは機械だけではないというのが私の考えです。教師そのものがマルチメディアであるべきで、またあるのだという考えです。

ですからあらゆることが教師はできなければいけない。特に幼児、小学生を教えたりしますと、その技術はいろいろです。その教え方は今、大学で教えていても非常に役に立っているのです。学生が必要なものを、とにかく羽鳥先生がおっしゃったいろいろな教材を作っていく。例えば全部を作っていくのは大変なのですが、まさに全てを投入して学生の必要なものを私が与えるのだと。しかし、それら作ったものを、直接学生が私から与えられるように見えなくても良いわけです。間接的に生徒にメディアがいくように準備してやる。そういう意味では教師は teacher であるよりは facilitator と私は考えております。facilitator, 学生・生徒と子どもが学習をしやすいように助けてやる。舞台でいうと黒子といいますかプロンプターというか、そういうような役をすべきであって、自分が俳優、スターになりたがるのではなく、陰で、舞台裏で一生懸命に教材づくりをする。いろんな学生・生徒のためにいろいろ考えて、あれがないか、これがないかと考えて与える。それに英語を盛り込むと考えていますが、なかなか理想通りにいきませんが、基本は、私は教師もマルチメディアである。教師自身がメディアである、もの

ではないというふうに考えております。

松本亨先生については、亡くなられてから20年近くなるのですが、私にとっては未だに私の恩師であります。平川先生からもラジオを通じて教わったし、直接平川先生のところに押しかけて行って教わったこともあります。松本亨先生はラジオでは21年、テレビなどを入れて22年、NHKから放送されていたのですが、その間、ほとんど聞きまくった。そしてお宅にも押しかけていった。授業も明治学院でやっていただいた。それを通じて、未だに私が権威と思っている松本亨は、減らない教材であるし、減らないメディアであると。ですから、私はあのような先生になりたいと今も考えているし、永遠に到達できないかもしれないけれども、目標にして頑張っているつもりです。

ですから、学んだことはいろんなことがあります。死ぬまで成就できないかもしれませんが、いつもあのような先生になりたい。いろんなことでいろんなことを言う人がいます。晩年、弟子に裏切られたというか、金儲けをする弟子がいて、非常に不味いことをして、その悩みで心臓をやられて亡くなってしまったのです。それで大変な濡衣を着せられたのですが、それも私は嘆いておりますが、全くお金についても、その他についても清廉潔白な方でありました。全てを生徒のために捧げました。

亡くなる少し前ですが、65歳で亡くなられたのですが、1979年だったと思いますが、その亡くなる寸前になりましたときに「僕は、もう教えるのが疲れたよ」とおっしゃったのです。心臓が弱っていたせいもあるのですが、その後の言葉が貴重だと思います「教えるというのは恋愛と同じでね、疲れちゃうんだ」というふうにおっしゃった。つまり、松本亨は教えることはまさに愛だと、全てをそれに捧げた。まさに教壇で倒れたと同じ死に方をされたと思うのです。私はそこまで我々ができないにしても、やはり教師はそのようなインパクトを、教えを、生徒に、子どもたちに与えれば、教師冥利に尽きると思うのです。松本亨は何を教えてくれたかといえば、私は「お前も俺のようになれば、なってみろ」と。これはあらゆる面です。

もう1つは、英会話の先生ですから speaking のことです。これは素晴らしい英語でありました。これははっきり言って、いい加減なインテリの外人でもおよびもつかないくらい立派な英語の演説者でもあった。文章でも、ご存じない方もいらっしゃるかもしれませんが、アメリカでファンラップ賞という、芥川賞とはちょっと違うのですが、それを終戦直後にアメリカでもらっております。

戦争中ですよ、これ。監獄で、コンセントレーション・キャンプから出されて、戦争中にアメリカ中、1,000回を超えるスピーチをして歩きました。それは日本人に対する誤解を説くためということだそうです。あの先生は、日本人にも戦争反対論者がいるんだよということを、命懸けで戦争中にアメリカ中で話をして回りました。こういうことは伝記を読めば出てきます。命懸けで、彼は日本のためにというか、世界のために働いた人だと思います。そのような情熱をもった教師が、我々に増えれば、今のような状況は打開できると思います。

それから、全てを捧げ尽くせるような教師に私はなりたいと思うのですが、なかなか。ちょうど先生が死んだ歳を超えてしまいました。100分の1もやっておりません。ですから、これから長生きをしてやってみようと思っています。

ですから、この先生はマルチメディアというか、しゃべる方も22年間、NHKから出しているレコードもたくさん残っています。平川先生の英語とは、かなり違います。一言でいえば格調の高い英語です。イギリス英語の人も、アメリカ英語の人も、カナダ英語の人が聞いても、安心して聞かれる品の良い英語です。しかも、教養の豊かな英語です。それでユーモアがあり、人間的な暖か味のあるものが100冊近い著書にもなっております。

それから書く方の力ですが、小説的なものを書いただけではなく、教材は平川先生もご自分で書かれたと思いますが、松本亨はラジオが21年間、テレビを入れると22年間、全部自分が教材を書きました。外国人は直していません。

ここに日本人が自信をもってよいエピソードがあるのです。初めの昭和25～6年の頃、ずっと英語の詩が載っていたのです。素晴らしい英語の詩でした。その詩を誰が書いたのか誰も知りませんでした。5～6年経ってから、あまりにも質問がくるので告白しました、松本亨が全部英語の詩を書いていたのです。英語詩集になっています。日本人にもそれができるんだ、しかも日本で生まれて、あの方は北海道の生まれで、高崎の旧制中学で3年まで、その後、明治学院。ですから、我々と同じように、初期は日本人の英語の先生から習った。伝記を読みますとおもしろいことに、初めて教えてくれた先生の英語が「ワンスー・アポン・ア・タイム…」というような感じで名調子だったそうで、その先生は坊さんだったそうです。明治学院にいて、中学校の3年か4年程度の英語だと分かったと。ですから我々と同じように learning を続けた。そうして英米人でも感心するような域に達したわけです。決して2世でもないし、アメリカ帰りでもない。できるのだ。つまり、あの先生を見れば、私は勉強が足りないということを感じます。ですから、我々が頑張っているから、生徒が我々を見て、先生のようになろう、と思う。これが最高のメディアではないかと思っております。

及川 ありがとうございます。続きまして福田先生にお願いいたします。

福田 私の方の質問は、「身の回りのことから英語で表現するということが1番良い方法だと思いますが、受験に対応するにはどうすれば良いですか？」という質問です。これにお答えする前に、英語を覚えるか覚えないうか、1番大事なことは何か。それは覚えようという気持ちを生徒にもたせるといふか、もてるといふか、それから質問をするということ。何でも聞き、答えてもらうという。私の大学では、英語は、最近ずっと学生が全くといって良いくらい質問をしなくなったのですが、他の大学の先生たちに聞いてみましても、大体そうらしいです。東大の先生にも聞きましたら、うちでもそうだと仰るのです。ただ1つだけ質問があると、先生

が廊下に来てから「質問があります」と。「何だ」と。「試験の範囲はどこまでですか。」これが日本を象徴しているのです。こういう状況で、ただ試験の点数を取るということばかり、受験ばかりを目標にしてきて、4つのうち1つにマルをつけることばかりやっけてきている。英語を話すといっても、グットモーニングとかグットバイだけでは限界がありますから、やはり専門的なことではなくても、何か自分でどンドン話をするということです。しかし、黙って何も言わない。これではどうしようもない。

戦後50年間は我々の世代がもってきて、世界のいろいろな国に比べて立派になったと思いますが、この次の50年はどうなるのか。先生は受験のことばかり考えて指導する、生徒の方はそれに対応する。先生の方は父兄の要望であるとかいうふうなことを言われるわけですが、本当に父兄の方がそれを願っているのか。「うちの子どもをどこかの大学に入れて下さい」と、それが最終的な目的ですか。これが今1番の重要な質問ではないかと思うのです。

先生がどこかの大学に入れる、そのために1点でも点数を取る技術を教えてやると言いながら、考える暇を与えないで、ただマルをつけることばかりやらせている。それできた大学生は我々の生徒になるわけですが、何の反応も示さないというのです。それで試験の範囲ばかりを気にしている。こんなことではやはり困るわけです。生徒に何か発言をしたいという気持ちを起こさせる。そうすると、やる気さえあればどうにかなるし、どうにでもなると思うのです。いろいろな機器がどンドン進んできましたが、我々の世代と比べて今の人が英語がしゃべられるかということ、全然そうではないと思うのです。

我々の頃は、ラジオもテレビもなく、千葉大の国吉先生という人が書いていますが、自分は毎日平川先生の時間になると、隣の垣根のところに行った。そうすると、隣のおばさんがボリュームを上げて聞かせてくれた。それで3年間、勉強して自分が英語をしゃべれるようになったことを、私どもが編集してきた平川唯一の『ファミリー・イングリッシュ』に書いていますが、そういう人がたくさんいるわけです。そういうようなやるという気持ちさえあればいろいろできる、また力をつく。それがないと、どうしようもないと思います。そう言っても、なかなか、皆がやるというわけにもいきませんでしょうが。英語でも何でも、全ては教育ではないかと—教育というか、心ではないかと思うのです。日本の、昔ながらの、そういう気持ちを日本中で、今教育審議会というか、そちらの方針としても、話す教育をしたいということです。話す教育といっても、何を話すのか、先生の言った言葉だけをただ繰り返すことだけが話ではないのです。自分がどう思うかとか、俺はこう思うとか、そういう気持ち。英語でも、他の学科でも、疑問をもって質問をするような、そういう人間を育てなければいけないでしょう。

平川先生のことでもいいますと、親子の話とか、兄弟の話とか、お祖父さんと孫の話ばかりなのですが、非常に情愛あふれる、日本の昔からの親子の姿をもっていた。昨日、判決が出ましたが、親子の関係がないところからいろいろなことが起こってくる。お互いに子どものことを、親のことを気遣っているような生活。そういうことが大事なことだと思うのです。言葉も口先

だけではなく、それより何を言うかというのが問題です。松本先生も言われましたが、生徒が下手でも良いから何を言うのか、どういう気持ちを伝えたいのかということが大事ではないかと、そういうことです。私としては、それくらいしか言えません。20世紀には、日本の根本的な教育の方針が、数学を教えるような教え方で教えたのでは、学校はだめなのです。

皆、口真似というか、母国語と同じようにして教える。母国語といいましても、母国語ではないのですからそれは限界がありますけれども、そのような繰り返しによって、すぐ役に立つような、すぐ使えるようなことだけでも教えていく。私は、これをやってから英作文力というのが格段と進歩したと自分で思いました。それから読解力もついたと思いました。まとまって、瞬間的に意味が分かって先生に向かって言うことは、そういうものの基礎です。ですから、会話をするとということが受験勉強の弊害になるというのは全くの大きな間違いであって、会話をするとするのは英語のもっともレベルの高いところをやるということです。受験勉強なんかは先生たちが1点、2点を問題視しているのですが、これでは10点、20点を問題視しているのです。だから会話をやって下さい。みんな会話をやって、会話をペラペラやるようになれば、読めもするし書けもするわけです。試験もやらなくてもいいのです。生徒は、そういう先生を尊敬するのではないのでしょうか。というのが私の結論です。

及川 どうもありがとうございます。他の方から質問がございますので、羽鳥先生にお願いします。

羽鳥 私は2つ質問があります。1つは動機づけのことです。「語学学習に動機づけが必要だけれども、もっと深いものがあるのではないか、もう少し動機づけを突っ込んで考えられないか」ということなのです。モチベーションと普通いっていますが、あれは動機づけの1番強いのは興味で、もう1つは人間の本能みたいなものがあるのです。

例えば、言葉を使いたいとか、集団に属したいとかいう本能みたいなものがあるのです。前半の興味のことですが、興味については、私は英語学習あるいは語学学習の興味を起すものに4つあると思うのです。私の本などにも書いたのですが、1番目は音声、2番目は分かるということ、3番目は使えるということ、4番目は身近かということ。もう1回言いますと、音声、身近かなこと、分かること、使えること。これを、授業などを組み立てるときに考えると良いのではないかと。教材を作るときにも、そういうことが出てきます。一応、語学学習の興味を起すものとして、今の4つを申し上げておきます。

もう1つは「視覚情報、目から入ってくる情報と音声の情報とをどのように組み合わせたら良いのか。」例えば、クローズド・キャプションといわれているような状態があるし、それをどのように使ったら良いのか。これは究極的には自分の教えている学生との関係もあるので、それぞれの先生が、自分のその場なりの知恵を働かせてやるよりしようがないのですが、こう

ということが言えます。クローズド・キャプションの字が出てきても、消すこともできるわけです。だから音だけで聞いていたのでは、いかにやっても分からないこともあるのです。画面がなければもっと分からないかもしれないけど、音声だけでは分からないけれど、画面があればもっと分かります。画面があっても分からないことがある。何回聞いても分からないのは分からないのです。

例えば、‘be going to’ というのがありますね。何々しようと。“I’m going to visit her.” それが ‘going to’ のところが、我々は ‘be going to’ なのですが、ゴナ (gonna) というのは、そういう音が崩れるということを知っていないとよく分からない。‘waiting’ なども ‘e’ がアメリカ英語だと前後に母音があると、‘d’ に近くなる。‘waiting’ が ‘waiding’ みたいになってしまうので、そういう現象を知らないと、いくら聞いても分からないのです。だから画面で見ても分からないときに音を出してやるとか、音を聞いて分からないときに文字で出してやると、「あっ、そうか。こういうときにこうなるのか」と分かるのです。そういう意味で、全部クローズド・キャプションに文字が出るというので、それを頼りにして見せながら聞くというよりは、やはり最初は音声で聞いてみて、2回くらい聞いてみて分からなかったら文字を出してやるとか、あるいは文字だけで見て生徒に、「君たちはどう発音する」なんてことを言ってみて、「実際はこうだよ」などとやってみるとか、うまく組み合わせるとというのが、まさにそれぞれの先生が自分の扱っている生徒に応じて工夫しなければいけないのです。クローズド・キャプションは字を見せるだけが主ではなくて、決して見せないで聞くようにさせるとか、そういうことも考えて良いのではないかというような気がします。

今のことに関連して申し上げますと、飯塚先生のおっしゃったことに関係があるのですが、最後は、まとめて使いこなすのは人間だ。人間の先生であるということです。機械は1度組み込んだことは忠実にやってくれるのですが、人間みたいに融通が利かないのです。

例えば、札幌近辺でもそうなっていると思いますが、切符を買うときに自動販売機でなんと間が遅いこと。お金を入れてから出てくるまで、ガチャガチャと出して出てくるまで時間がかかるのです。それがコンピューターになると、私はマッキントッシュと使っているのですが、最初スイッチを入れてからウエルカム・トゥ・マッキントッシュと出てくるまで時間がかかるのです。イライラしてしまうことがあるのです。学校で使っているLL教室にもコンピューターが入っているのですが、まず最初にクラス名を入れなくてはならない。クラス名を入れてから出欠を取らなくてはならない。出欠を飛ばすわけにはいかないのです。次に行けないのです。あんなのを自分でやっていたら、「今日はこれだけの試験だからいいや」なんていう調子でいくのですが、そういう加減ができない。だから、機械は加減ができない。正確に打ち込んで、やれといわれたことはちゃんとやってくれるのですが、加減ができないので、人間が調整しなくてはならない。教師のように、その場、その場に応じた判断ということで任せられない。

だから、いかにマルチメディアが進んで、うまく授業課程・教材ができていても、それを運用するのは先生です。臨機応変に、どこどこをカットしたり、あるいは付け加えたりというのは、やはり教師がやらなくてはいけないというようなことが残ると思うのです。教材で生徒に練習をさせるのは機械でもできるかもしれないけど、それを作る教材も教師ですし、今度はできた教材を、実際に教室で運用するときに、適当に取捨選択するのも教師ではないか。これはやはり考えなくてはならない。以上です。

及川 どうもありがとうございました。先生方のいろいろなお話を伺っていても、結局いろいろな語学教育の様々な問題点が教師自身にふりかかってくるというか、戻ってくるというか、そういうような不安にかられております。

フロアの方から質問がありましたらお受けしたいと思いますので。

女性 福田昇八先生にお聞きしたいのですが、話せない語学教師とか語学改革のことについて今日もお話になったのですが、中・高校の教員の集中講義というのをおやりになって、すごく力のある、話せる教師をたくさん輩出なさったそうですが、その先生たちが自分の学校に戻って、クラスやその教育の内容がどういうふうに変わっていったのか、そこのところをお聞かせ願えればうれしいと思っております。

福田 どんなふうに変ったかですね、先生は確かに変わりました、2カ月毎に最初と真中と最後に、昔のことですから、ミシガンテストというのをやりました、その統計をずっと取っているのですが、100点満点で10何点か上がってランク・アップということになるわけです。しかし、先程も言いましたが、今の受験体制のもとで、特に高校の場合はどうやって彼らを取り入れるかが非常に難しい問題です。1番大事なことは、中学校の1年生、最初のところで非常にそういうような現象を受けたといいますか、力のある人が教えてくれれば良い生徒ができますし、そういう先生から受け持たれて出てきた生徒は大分おります。

ただ、それがどれくらいになったのか、それもなかなか話せるというまでにはいかないのです。やはりそれを考えますと教科書の1課、2課、3課、4課とやっていかななくては、どうしても授業が進んだということにはならない。教科書なども使わないで家族英語を教えるとか、そういうふうなことは公立学校はできないですし、私立学校でもできないでしょう。それでもう少し根本的な面で英語の指導法そのものを変えると、もう家庭英語とかが最初の時間に出てきても良いわけです。家事、日常の会話では、家族語でどんどん言っているわけですから、そういうふうな教え方をした方が良いのではないか、というのが私の今の考えなのです。しかし、そういう教え方をして実績を上げたという人は、まだいないです。何年か前からあちこちで言っているのですが、それを実行して、こういう成果が上がりましたと言ってきた人はいません。

及川 ありがとうございます。まだ、お手が挙っておりますが。

男性 どなたでも結構なのですが、ご意見を伺います。現在、私は高校で英語を教えています。よくこういう会があると大学の入試とかという話になります。北海道に300何十の高校がありますが、あまり受験と関わりのない高校も多数あります。私が今現在いる札幌の高校もそういう高校でして、そういう子たちにも英語を教える。例えば、小学生ですと $2 \times 1 = 2$ とか、 $2 \times 3 = 6$ と楽しんで生徒が競争しながらやるのですが、高校生ぐらいになるとなかなかそういうことはできなくなるのです。自意識もだんだん出てくるし。そういう中でどうやって彼らに英語の必要性を訴えるかとなると、私もなかば意図的に舞い上がって「英語は国際的に必要だ」と授業の中でおもしろ、おかしくやるのですが、そういうふうになんとか生徒を引きつけようとしています。なかなかこれは難しいわけです。

よく考えてみると、例えば私が札幌にきて8年くらいになりますが、札幌は日本でも有数の国際都市だとは思っているのですが、実際に生徒たちが家に帰ったときに、どれほど英語の必要性を切実に感じているかという、随分疑問なところがあるのです。教える側としては国際時代だからと一生懸命に説くわけですが、庶民感覚というか生徒の感覚からすると必ずしもそうではない部分が多いのではないかと。そのあたりを私は冷静に捉えながら授業をしていかなければならないという、これは感想です。そういうふうに考えています。

もう1点ですが、よく英語を話す場ということになりますと、とにかく英語になったときは積極的に発表する態度を養わなければならないとか、誤解を生じないように顔の表情もにこやかにしなければならないとか、イエス、ノーをはっきりしなければならないとか、恥ずかしがってはいけないよとか、大きい声を出しなさいとか言いますが、英語を中学校で学び始めたときに何もかも一緒に教えなければならないということなのです。それは生徒にとっても負担ですし、教える側にとってもやはり負担なわけです。

最近、審議会で、また変わりますが、例えば環境などがキーワードになっていますが、それと同じように、アメリカなどでもやっているスピーチですとか、最近よく書店でも本を見かけますがディベートですとか、そういう発表に関係したようなことを英語以外の教科でも真剣になって早期にやらなければならないのではないかと、私は考えています。いかがでしょうか。

福田 実はこれはどこでもそうでしょうが、熊本県で国際理解教育という委員会ができていて、そこで小学校、中学校の国際理解教育ということを取りあげています。国際理解といっても、自分の国のことを知らなくてははいけないし、国際的な人間になろうという意味では、自分の意見をもって発言をするようなことをしなくてははいけないし、文章を書く力がなくてははいけないと、そういうふうなことを言っているわけです。

今、ご発言があった通りで、英語だけの問題ではないのです。英語でしゃべる前に、まず日

本語で何か言いたいということがないと、どうしようもないです。英語だけで暮らすときにしゃべるようなわけにもいかないですし、今のところではだいたい小学校はよくしゃべるけれども、中学校にきた途端に生徒はあまりものを言わなくなるし、高校にきたら何も言わなくなる。大学に行くと、全く貝になったような、だんだん悪い傾向がありますが、そうではなくて、どんどん小学校から中学校、大学まで発言して、これはアメリカなどを大いに見習うべきところではないかと思うのです。そういうふうな考え方といますか、教育といますか、これは教育の根本に関わることです。いろいろ、みんな、そういう方向で進んでいるとは思いますが、今、熊本県では国際理解教育という面を1つの突破口として、各教科すべてに渡ったことですので、例えば小学校の授業というのは1人の先生が全部教えるわけですから、どうにでもやり方ができるわけです。そういう関心を高めようというようなことをしているのです。これは当然、英語のことも出てくることであろうと思っています。

岩城 英検の方でも、コミュニケーションなものを活かして、より積極的な態度というものを評価項目にも取り入れたと思うのですが、羽鳥先生、この点に関していかがでしょうか。

羽鳥 英検の方の面接に、英検のリニューアルというのに絡んで *attitude* というのが評価項目に入ってきました。「それは何で？」という方が時々いるのですが、学習指導要領には積極的なコミュニケーションを図ろうとする「積極的な態度を養う」という全体目標の中に項目があるのです。それで、英検でも、外国語教育の中に積極的な態度というのを取り入れようと、それで *attitude* が出てきたのです。*attitude* が出てきたのですが、あれは計れるのかという意見がよくあるのですが、やはり面接委員をなさった方は分かると思いますが、受験者の中にたいして単語は知らないのだけれども、何とかして言おうと思う子とか、あるいはすぐに諦めてしまう子もいるのです。そういうので見ていると、積極的な態度というのが何となく感じられると思って、あれを入れて、配点は3点ですからあまり比重は大きくないのですが、それくらいの範囲なら良いのではないかということで、配点も少なくしてありますが、やはり態度というのはいくらも考えていかなければならない、奨励する意味でも、入れました。

先程の福田先生に対するご質問の中に、生徒に身の回りのことなどで英語の必要性を感じさせるということで、私自身の感じですと、大学の1年生ぐらいだから、高等学校の2、3年生ぐらいには適応できると思うのですが、役に立つのは英字新聞をうまく利用すること。英字新聞なんて難しく取っ付けないというかもしれないですが、新聞の写真の下についているキャプション。それだけでも良いです。ああいうのを取り上げてやると、英字新聞などはご存じのように、すぐ前の日のことが出てくるのです。それで生徒は「ああ、そうか昨日問題になったことが、こういうふうに英語で出てくるのか」というのが分かるのです。私自身は学生に時々、英字新聞の1部分を投げ込みでコピーにとってきて渡して、「昨日の新聞にこういうことが出

ていたけど、昨日言ったことはこういうことだよ」などと言ってやると、「ああ、そうですか」と、学生の方はすぐに身近に感じるらしいのです。だから、英字新聞を先生方が目を通して、本当は毎日、目を通していろいろなおもしろいことが見つかるのですが、週に1回でも良いです。例えば、木曜日なら木曜日と決めておいて、駅売りのところで新聞を買って、毎週木曜日に見ていると木曜日にこんな記事が出ているなど分かったりして、そこからちょっと取って渡して学生に見せてやったりすると、とてもおもしろがったりします。だから、ちょっと学年が進んだところでは英字新聞を利用するというのも良いのではないかという気がしています。

飯塚 先程のご質問は大変厳しいというか、重要な問題だと思うのです。学生・生徒・子どもに英語の必要性をどのようにして伝えるか。これは大変難しいのですが、私は英語教師自身が英語が大事なものであると。先程のマコーネル先生のお話のようなことです。やはり教師自身が非常に重要な大事なことだということを態度で示さなければ、口だけで年に1回くらいだけではだめなのです。私は徹底して学生生徒には英語でしゃべるようにしています。これははっきり申しまして照れます、日本人ですから。私の仲間にトミー植松という人が私より何倍も英語のうまい人が玉川学園大学というところから私のところにきてくれていますが、素晴らしい英語を書くし、しゃべるし、冗談でも何でも英語で言うのですが、日本人教師とはなかなかしゃべってくれません。学生にも聞いてみますと同じで、学生には英語でしゃべってくれない。スピーチを教えてらっしゃるので、パブリック・スピーキングの先生でも、そのときはしゃべるのですが。そういうような心理的な抵抗、これをなくしてしまはしないと、我々が英語をしゃべらなければ、学生には生徒には英語の必要性など分からないし、伝わらないと思うのです。照れや恥ずかしさをなくして、徹底して、私は英語の教師だ、英語のあらゆる面での教師だ。読み、書きもやるけれども、徹底してしゃべるということで模範を示しています。

白鷗大学での8年間は、学生に徹底的に、私の研究室では日本語は絶対にしゃべるなど、しゃべらせません、追い出します。ちゃんと書いてあります`English is spoken; American understood`と書いてあります。そして、`Canadian comprehensible`といろいろ書いてある。英語のできない奴が「ううっ」と言いながら、今年などは7月に私は教えていないのですが、ある学生が入ってきて「先生、先生の授業を聴講させて下さい。ゼミでも良いですから」と言ってきた。「No Japanese, Please」と言ったら、「ううっ」と。彼は“Can I dive in you class?”って。「もぐる」って言うんですね。「auditorにならせてください」そう言っているんですね。それでもしゃべる。ひどいといっても、おもしろいです。あの先生のところに行ったら、英語でしゃべらざるを得ないということを徹底してしまえば、学生は必要性を感じます。

逆のことを言いますと、ひどいですよ。英会話を教えているアメリカ人の先生に、期末にCがついたと文句を言いに行った奴がいた。その英語の先生は私の研究室の前でこう言っている

のです。日本語で「先生、僕のはCだよ」に対し、“speak in, Japanese.” そしたらアメリカの English teacher が「だって君、遅れてきたじゃないか。レポートを出さなかったじゃないの」なんて日本語で言っているのですから。これでは“The Student didn’t need to speak in English to the American teacher, the professional teacher in English conversation.” こんなことが起こっている。アメリカ人に起こっています。日本人はもっとです。徹底して私は英語の教師だ。英語を教えている。私がメディアだと徹底して、それから始めていただく。だけでも、照れますから、時間がかかるのです。何かを徹底してしなければと、私はそれを第1条と思っています。

忍耐だけでも、It takes time to master a language. ですから何年も続けなければ。私のところに飯田高校というところから普通の生徒が来て、TOEIC が400点の子でしたが、その子が卒業のときには780点、TOEFL でいえば500点を超える点数にちゃんとなって卒業しました。普通の生徒でも、私のところにくれば全部増えるということにしまえば、必要性を生徒が感じる。

ところが、最近私はカナダに行ってきました。そうしたら、外人が日本語をしゃべっているのです。そうすると英語の必要性を感じなくなるのです。

ところが同じホテルに泊まったら、夜中に私のところに電話がかかってきて、添乗員にかければ良いのに、添乗員が外出しておりまして、バスルームの戸が開かなくなったと、ルームメイトがバスルームから “She cannot get out of the bathroom. Come help me. Help my roommate.” 日本人ではないのです。会話のところは日本語で通じますが、ホテルに入ってバスルームの戸が閉まってしまった、これは stuck up です。そういうようなことで、絶対に英語が必要なのです、はっきり言って。ですから私が生徒たちの前では絶対に英語を使うということを、100%とは言いませんが、90%実行すれば、生徒も必要性を痛感するに至ると思うのです。以上です。

及川 ありがとうございます。そろそろ時間なのですが、もうお1人は是非にという方がいらっしゃいます。先ほどご講演いただきましたマコーネル先生です。

講演会・シンポジウム懇



マコーネル I’d like to thank you very much for the interesting panel discussion. I had a wonderful interpreter, so I have understood some of it. I will add I understood your English, Professor Izuka. I want to ask you a very short and simple question. I’ve noticed in my experience, limited experience, in Japan, the classes are very very large and in the United States in our language classes there is always a limit. When the class reaches

only twenty-five students, we then create a second section. How isn't that possible in Japan? I was wondering. Would that be possible in Japan? Because having small classes might make it easier for the students to see and the teachers to see, too.

飯塚 My answer is that a small class is not the answer. You don't know if we have only twenty students and if the teacher doesn't speak English, they don't learn any English. But if the teacher speaks to one hundred students in English, they'll be able to speak English. In my case, I teach with an American teacher or a British teacher, and we don't speak Japanese, of course, you see, we've got a good result, when we teach one hundred students at a time. Foreign teachers can teach one hundred students, as well. O.K.? But we should be entertainers.

及川 よく言われることですが、日本のクラスのサイズは大きいということですが、福田先生のご意見をお聞かせ下さい。

福田 僻地校というのがあります。生徒が何人かしかいない、そういうところは理想的な教育ができるはずですよ、そこだけを言いますと。ところが僻地校の生徒が特に成績が上がったという話は聞かないのです。それから受験校でない英語の必要でないところは、本当に先生が好きなように教えて良いはずなのですが、実業高校の生徒がしゃべれるようになったという話も聞きません。これは先生の教え方が悪いのではないかと思います。だから、数を減らしたからといって良くなっていくものでもないと思うのです。

飯塚 5人を教えても大変ですよ。私は実験をやりました。5人の生徒を教えても大変です。今は全部で学生10人くらい教えています、これに対応していくのは大変です。大きい方が楽です。ごまかしがききますから、大きいからだめなんだといっておけば。私はそうは言いません。

及川 ありがとうございます。

羽鳥 クラスサイズは、度々、文部省に要求を出しているのですが、なかなか減らしてくれないです。最近ちょっと減らすことを考えているのです。最近、中学校の英語教育が必修になったというのを新聞の記事とかテレビのニュースでお分かりになったと思いますが、今まで選択科目なのです。ところが教員の団体などで何回も必修にしてくれ、必修にしてくれと繰り返して言ってきたけれど、文部省は絶対要求を聞いてくれなかった。ところが、中央教育審議会

がひとつと言ったら文部省は動いたのです。だから、非常に難しいですが、ちょっと押すところがあるのではないかと思います。ワイワイ騒いでもだめなのですね。

だから、非常に難しいと思うのですが、文部省の規則に従えば、ある程度の数は今のところやらなくてはいけないです。ただし、先程からいろんな先生がおっしゃっているように、少なくなつたから必ずしも能率が上がるとは限らないし、一般的には確かに少ない方が良いでしょう。

パーマーという人が昔言ったのは、20人前後が良いというのです。もっと少ないと、あまり意気が上がらないのでだめだというのです。だから、20人くらいを目指せば良いのですが、これは文部省の規則に従ってはいけません。だから、私立学校はある意味で校長の裁量で考えることができるし、工夫で、先生方同士のアグリーメントがうまく得られれば、何かちょうど良いくらいの人数にしていくということを考えても良いと思うのです。

10日ほど前に、私は東京都内の短期大学の英語会議に出たのです。そこで昭和女子大の理事長さんが講演をしたのですが、「昭和女子大は私立大学だからできることをしてみよう」と。文部省にいわれる前にやってみようというので、こういうことを考えたのです。学年を前倒しにしてやってきて、最後の1年を空ける。中学校3年、高等学校3年だけれども、教材をどんどん前倒しにして、最後の1年を空けたのだそうです。その理事長さんは「うちの学生みたいな特に優れた学生でなくても、そういうことができるのです」と。それで最後の学年をどうしたかということ、希望者は大学に行って授業を受けてもよいとか、いわゆる補習教育を受けてもよいとか、そういうようなことをしたわけです。「やってますよ」なんて報告してくれて、他の人はちょっと、うなつたのですが、私立でなければできないことなので、これは先生方同士の話し合いができないとだめだし、理事長さんなどの承認がなければできないかもしれないけど、ひょっとしたら今や公立でも中、高一貫教育という話が出ていまして、だから一貫の方が良いことがあるかもしれない。中学から高校の受験に悩まされなくて、だからやってみるのも良いのではないかという気がします。昭和女子大方式で、前倒しにしてきて後ろの方は空けて、前倒しのところでは理想的な教育をやるけど、どうしても受験の準備をしなくてはならない最後の何か月間かで受験勉強をしてやるというのも良いかもしれません。

私が習った高等学校、これは旧制の高等学校ですが、その先生は『サイラス・マーナー』とか、そういうことばかりやっている先生で、およそ受験のことなどやらないで、1月になってから、「君たちは、あと少しで受験をするんだから、この2カ月は受験勉強をさせるぞ」と言っていて、旧制の高等学校で問題をやらされたことを覚えています。だから理想的な教育をした方がなるだけ良いので、なるだけ頭の方でやって、ただし前倒しにしておいて、最後の数ヶ月を受験勉強をするなら受験勉強をしてやると、もし受験のことがどうしても頭から離れないし、やらないと父兄からの要求があるというなら、そういうことも考えられるのではないかという気がします。

及川 ありがとうございます。まだまだたくさんのお話を伺いたいし、フロアの皆様方も随分お話になりたいことがあると思いますが、時間の制限がありまして、以上でおしまいにしたいと思います。

私も、もう40年も英語の教員をやっております、それで、ずっとずっと悩み続けて、今も悩んでいるような事柄が今日は問題にたくさん出てまいりました。私が今お付き合いしている学生たちは、必ず21世紀に生き延びていく学生たちですから、そのことを考えると、これで良いのかなという思いがたくさんございます。

しかし今日、講師の先生方からの、いろいろと戦後50年、英語教育を取り巻く状況が変化してきたとしても、それにしても日本人が英語を話すのが下手なのではないかという指摘がございました。それではその状況をどうするのかといわれたときに、マルチメディア、いろいろなメディアもたくさんあるわけですが、最終的にはどうも教師自身がマルチメディアになるのではないかというあたりが、大きなヒントになるのではないかと、私などは考えております。

いろいろそれぞれご感想があらうかと思いますが、どうぞこの後、懇親会がG館8階で行なわれますので、そちらの方で講師の先生方を交えて、自由なお話し合いをしていただきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。